

横浜ダンスコレクションEX2015 コンペティションI 審査員総評

毎年、海外ダンスフェスティバルの数多くのディレクター等を惹きつけ、日本の若い才能を世界へ紹介する横浜ダンスコレクションは、1996年の創設から時代と共にそのフレームを少しずつ変えながら、名実ともに世界に開かれた日本最大のダンスプラットフォームとして、20年間も求心力を持ち続けている。

新たな潮流に直に触れることができた2015年、コンペティションIは作品部門であるので卓越した振付・構成は一つの評価軸だと思うが、そのようなコンテクストを超越する力、身体に潜む時空とムーブメント、そして個性と新たな視点に期待して臨んだ。

審査員賞と若手振付家のための在日フランス大使館賞を受賞した川村美紀子の『インナーマミー』は、トヨタコレオグラフィーアワード2014受賞作であるが、ほぼ新作と言えるくらいに構成・音楽・衣裳など緻密に再創作を試み、強烈な身体そのもので衝撃的に放ったリアリティは今も脳裏に焼き付いている。大学在学中に横浜ダンスコレクションEX2011最優秀新人賞を受賞し、充実した創作と協働を重ねる川村美紀子にとって、さらなる飛躍のフランス滞在となることを願っている。

奨励賞の小暮香帆は鋭く美しい瞬間を、遠江愛は圧倒的な野性性をみせたが、作品全体にテンションを繋ぐことが難しかった。同賞のラゼル・アン・アグダ・ミッチャオは生まれ育つ社会の不条理を描き出した。シビウ国際演劇祭賞とTouchpoint Art Foundation賞の黒須育海/香取直登とMASDANZA賞の梶本はるかにも、大きな可能性を感じている。異なる文化背景を持つ各地の観客と良い交感・交流をして新たな創造の種を発見してほしい。時代を共有して身体と表現に新たな視線を向けるアーティストたちと共に、ダンスの可能性を発信する横浜が、創造の未来へ新しい価値の探究を続ける大きな役割を持っていることは間違いない。（小野晋司）

トークやショーケース・パフォーマンスが同時進行するなか、2日間で10組と以前より短くなったコンペティションIは、各作品の匂いやパワーを感じ分けるのにはむしろ好都合だった。

審査員賞・在日フランス大使館賞ダブル受賞の川村美紀子のエネルギーが図抜けているのは一目瞭然。その力で周囲を巻き込み、思う存分創って踊れば良いと思う。小暮香帆の『遙かエリチェ』は、詩的なタイトルと粘り強い動きのくっつき方が不思議な魅力。梶本はるか、遠江愛らの確信に満ちた動き、黒須育海/香取直登の作り出す得体の知れない繊細な世界も心に残る。本選ラストに登場のラゼル・アン・アグダ・ミッチャオの颯爽とした振付も印象的だった。（新藤弘子）

川村美紀子が圧倒的だった。『インナーマミー』は、トヨタコレオグラフィーアワード2014受賞作と同じ表題だが、その作品を全否定するかのように完全に作り変えてきたことに驚かされた。緩急自在の構成にも才を見せる彼女が、今回はあえてエネルギーのままに突っ走った。コンテンポラリーダンスの先端がその行く先を決めかね逡巡しているように見えるいま、その疾走はむしろ小気味よい。黒須育海/香取直登、遠江愛、梶本はるか、小暮香帆の4作品はエキサイティングな瞬間がそれぞれにあったが、その強度が作品全体には行き渡っていなかった。しかし、いずれも大きな可能性を感じさせ、次作が楽しみ。詳細は3月27日発売の「ダンスマガジン」5月号をご覧ください。（浜野文雄）

1996年、若手振付家の発掘・発信・育成とコンテンポラリーダンスの普及を目的にスタートした「横浜ダンスコレクション」は、今年で20回目を迎えた。コンテンポラリーダンスにおける新たな才能の発見、そしてそれらの才能を継続的にバックアップしていくという取り組みは、素晴らしい成果を上げてきたと思う。が、今年度のコンペティションIについて言うと、川村美紀子という才能の再確認という収穫はあったものの、残念ながら「目を奪われるような才能の発掘」はできなかった。多くの人が、カラダとアタマと、そしてさまざまなモノ（照明や映像、オブジェや小道具など）を使って“ダンス作品”を作ろうとしている意思と努力は垣間見える。けれど、自明なことではあるが、健康維持や美容など、「人にみせる目的ではなく、自己研鑽のために、ヨガやピラティスをしたり筋トレをしたりダンスをしたりすること」とは違い、「さまざまに違う感性そして価値観を有する他者にみせることを前提として“作品”をつくっている」とするならば、やはりそこにはその必然性と切実さがないといけなだろう。ダンスは巷に溢れている。けれど、だからこそ、未だみたことのないダンスが見たい。そう切に思う。（前田圭蔵）

横浜ダンスコレクション EX2015 コンペティション I 審査の後、パリへ来ています。仏国立ダンスセンター、CND (Centre national de la Danse)のスタジオでインターナショナルな 14 人の若いダンサーたちとの新作『真夜中のニジンスキー』（本年 12 月パリの La Villette で初演予定）の振付・稽古を始めたところです。その CND の発行する“recherches”叢書から Sylviane PAGES の “Le buto en France - malentendus et fascination”が刊行されたばかり。日本語への翻訳刊行が早急に望まれる労作だ。

さて、パリにいて切実に、「パリも危ない、日本はさらに危うい・・・」と思う。横浜ダンスコレクション20周年、＜ダンスの身体＞は今こそ他者へと開かれる必要がある。今こそ、ダンスの混成、踊る身体の変形から学ばねばならぬ。相互に＜危うさ＞を。自らの身体が、最初の＜他者＞であり＜異物＞なのだ……。同一性の神話から限りなく遠く、＜外れてあること＞、それが踊ること。（室伏鴻）